



白衣の戦士

〈長野県〉

花岡こずえ

24歳

「看護師さんは白衣の天使じゃないくて、白衣の戦士だよ」

入院や処置に追われて、午前中に約束したはずのYさんの体拭きができたのは午後4時を回ってからだった。

看護師になってから3年。ミスの許されない仕事、日々こなさなければいけない業務に追われて、目標にしていた「患者さんに寄り添う看護」がどんなものなのか分からなくなっている。Yさんに「白衣の戦士」と言われたのはそんなときだった。

Yさんは肺がんを患っており、胸には抜いても抜いてもたくさんの水がたまる。その息苦しさをいつも「海で溺れているみたいだ」と言っていた。

体を拭くだけでもYさんの酸素濃

度はみるみる下がりが、唇はすぐに真っ青になってしまう。Yさんの苦しさが強くならないように、体拭きを数回に分けて短時間で行ったり、リハビリの担当者に呼吸法を教えるもらっていた。

ある夜勤の日、Yさんの酸素濃度の低下を知らせるアラームが鳴り、部屋に行くとYさんはまたとても苦しそうだった。少しでも息が楽になるように、呼吸に合わせて胸に手を当てたり、背中をさすったり、額の汗を拭いた。SpO₂経皮的動脈血酸素飽和度も回復してYさんは、「ああ苦しかった……。また海で溺れていた……。そしたら白衣の戦士が助けに来てくれた……」。

その数週間後、Yさんは家族に見

守られながら息を引き取った。エンゼルケアを終えた後、酸素マスクをつけていないYさんは何だか違う人のように見えた。

Yさんは天国で胸いっぱい息を吸えているだろうか、もう海で溺れていないといいな。

Yさんがどんな意味で私のことを「白衣の戦士」と言ったのかは分からない。もしかしたら、いつも余裕なく戦っているような険しい表情をしていたからかもしれない。でも最期に過ごした期間で、病気を相手に共に戦った戦友だと思っていてくれたならば、私はこれからも「白衣の天使」ではなく、「白衣の戦士」であり続けたいと思う。

